

[B年] 聖霊降臨節第19主日(2023年10月1日)**【旧約聖書日課】アモス書6章1～7節**

- 1 災いだ、シオンに安住し
サマリアの山で安逸をむさぼる者らは。
諸国民の頭である国に君臨し
イスラエルの家は彼らに従っている。
- 2 カルネに赴いて、よく見よ。
そこから、ハマト・ラバに行き
ペリシテ人のガトに下れ。
お前たちはこれらの王国にまさっているか。
彼らの領土は
お前たちの領土より大きいか。
- 3 お前たちは災いの日を遠ざけようとして
不法による支配を引き寄せている。
- 4 お前たちは象牙の寝台に横たわり
長いすに寝そべり
羊の群れから小羊を取り
牛舎から子牛を取って宴を開き
- 5 堅琴の音に合わせて歌に興じ
グビデのように楽器を考え出す。
- 6 大杯でぶどう酒を飲み
最高の香油を身に注ぐ。
しかし、ヨセフの破滅に心を痛めることがない。
- 7 それゆえ、今や彼らは捕囚の列の先頭を行き
寝そべって酒宴を楽しむことはなくなる。

【使徒書日課】ヤコブの手紙2章1～9節

1 わたしの兄弟たち、栄光に満ちた、わたしたちの主イエス・キリストを信じながら、人を分け隔てしてはなりません。2 あなたがたの集まりに、金の指輪をはめた立派な身なりの人が入って来、また、汚らしい服装の貧しい人も入って来るとします。3 その立派な身なりの人に特別に目を留めて、「あなたは、こちらの席にお掛けください」と言い、貧しい人には、「あなたは、そこに立っているか、わたしの足もとに座るかしていなさい」と言うなら、4 あなたがたは、自分たちの中で差別をし、誤った考えに基づいて判断を下したことになるのではありませんか。5 わたしの愛する兄弟たち、よく聞きなさい。神は世の貧しい人たちをあえて選んで、信仰に富ませ、御自身を愛する者に約束された国を、受け継ぐ者となさったではありませんか。6 だが、あなたがたは、貧しい人を辱めた。富んでいる者たちこそ、あなたがたをひどい目に遭わせ、裁判所へ引っ張って行くではありません

か。7 また彼らこそ、あなたがたに与えられたあの尊い名を、冒瀆しているではないですか。8 もしあなたがたが、聖書に従って、「隣人を自分のように愛しなさい」という最も尊い律法を実行しているのなら、それは結構なことです。9 しかし、人を分け隔てするなら、あなたがたは罪を犯すことになり、律法によって違犯者と断定されます。

【福音書日課】ルカによる福音書16章19～31節

19 「ある金持ちがいた。いつも紫の衣や柔らかない麻布を着て、毎日ぜいたくに遊び暮らしていた。20 この金持ちの門前に、ラザロというできものだらけの貧しい人が横たわり、21 その食卓から落ちる物で腹を満たしたいものだと思っていた。犬もやって来ては、そのできものをなめた。22 やがて、この貧しい人は死んで、天使たちによって宴席にいるアブラハムのすぐそばに連れて行かれた。金持ちも死んで葬られた。23 そして、金持ちは陰府でさいなまれながら目を上げると、宴席でアブラハムとそのすぐそばにいるラザロとが、はるかかなたに見えた。24 そこで、大声で言った。『父アブラハムよ、わたしを憐れんでください。ラザロをよこして、指先を水に浸し、わたしの舌を冷やさせてください。わたしはこの炎の中でもだえ苦しんでいます。』25 しかし、アブラハムは言った。『子よ、思い出してみるがよい。お前は生きている間に良いものをもらっていたが、ラザロは反対に悪いものをもらっていた。今は、ここで彼は慰められ、お前もだえ苦しむのだ。26 そればかりか、わたしたちとお前たちの間には大きな淵があって、ここからお前たちの方へ渡ろうとしてもできないし、そこからわたしたちの方に越えて来ることもできない。』27 金持ちは言った。『父よ、ではお願いです。わたしの父親の家にラザロを遣わしてください。28 わたしには兄弟が五人います。あの者たちまで、こんな苦しい場所に来ることのないように、よく言い聞かせてください。』29 しかし、アブラハムは言った。『お前の兄弟たちにはモーセと預言者がいる。彼らに耳を傾けるがよい。』30 金持ちは言った。『いいえ、父アブラハムよ、もし、死んだ者の中からだれかが兄弟のところに行ってやれば、悔い改めるでしょう。』31 アブラハムは言った。『もし、モーセと預言者に耳を傾けないのなら、たとえ死者の中から生き返る者があっても、その言うことを聞き入れはしないだろう。』」

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

アモス書 6章1～7節

- 1 災いあれ、シオンに安住し
 サマリアの山を頼みとする者
 イスラエルの家が行って仕える
 国々の名高い頭たちに。
- 2 カルネに赴いて、よく見よ。
 そこから、ハマト・ラバに行き
 ペリシテ人のガトに下れ。
 あなたがたはこれらの王国にまさっているか。
 彼らの領土は
 あなたがたの領土よりも大きいか。
- 3 あなたがたは災いの目を追い払おうとして
 暴虐の支配を引き寄せている。
- 4 あなたがたは象牙の寝台に横たわり
 長椅子に寝そべり
 羊の群れから小羊を
 牛舎から子牛を取って食べている。
- 5 豎琴の音に合わせて歌に興じ
 グビデのように自分たちのための楽器を考え出す。
- 6 鉢でぶどう酒を飲み
 最高の香油を身に塗るが
 ヨセフの破滅に心を痛めることがない。
- 7 それゆえ、今や彼らは捕囚の列の先頭に行く。
 寝そべる者たちの酒宴も終わる。

ヤコブの手紙 2章1～9節

1私のきょうだいたち、私たちの主、栄光のイエス・キリストへの信仰があるなら、分け隔てをしてはなりません。2あなたがたの集会に、金の指輪をはめ、きらびやかな服を着た人が入って来、また、汚れた服を着た貧しい人が入って来たとしみす。3きらびやかな服を着た人に目を留めて、「どうぞ、あなたはこちらにお座りください」と言い、貧しい人には、「あなたは、立っているか、こちらで私の足元に座るかしていなさい」と言うなら、4あなたがたは、自分たちの中で差別をし、悪い考えに基づいて裁く者になったのではありませんか。5私の愛するきょうだいたち、よく聞きなさい。神は、世の貧しい人を選んで信仰に富ませ、ご自身を愛する者に約束された御国を、受け継ぐ者となさったではありませんか。6ところが、あなたがたは貧しい人を辱めたのです。富んでいる者たちこそ、あなたがたを虐げ、裁判に引き立てて行く

のではありませんか。7また彼らこそ、あなたがたに与えられた尊い名を冒瀆しているのではありませんか。8もしあなたがたが、聖書に従って、「隣人を自分のように愛しなさい」という最も尊い律法を実行しているのなら、それは結構なことです。9しかし、人を分け隔てするなら、あなたがたは罪を犯すことになり、律法によって違犯者と定められます。

ルカによる福音書 16章19～31節

19「ある金持ちがいた。紫の布や上質の亜麻布を着て、毎日、派手な生活を楽しんでいた。20この金持ちの門前に、ラザロと言う出来物だらけの貧しい人が横たわり、21その食卓から落ちる物で腹を満たしたいと思っていた。犬もやって来ては、彼の出来物をなめていた。22やがて、この貧しい人は死んで、天使たちによってアブラハムの懷に連れて行かれた。金持ちも死んで葬られた。23そして、金持ちは陰府でさいなまれながら目を上げると、アブラハムとその懷にいるラザロとが、はるかかなたに見えた。24そこで、大声で言った。『父アブラハムよ、私を憐れんでください。ラザロをよこして、指先を水に浸し、私の舌を冷やさせてください。この炎の中で苦しくてたまりません。』25しかし、アブラハムは言った。『子よ、思い出すがよい。お前は生きていた間に良いものを受け、ラザロのほうは悪いものを受けた。今は、ここで彼は慰められ、お前はまだえ苦しむのだ。26そればかりか、私たちとお前たちの間には大きな淵が設けられ、ここからお前たちの方へ渡ろうとしてもできないし、そこから私たちの方に越えて来ることもしできない。』27金持ちは言った。『父よ、ではお願いです。私の父親の家にラザロを遣わしてください。28私には兄弟が五人いますので、こんな苦しい場所に来ることのないように、彼らによく言い聞かせてください。』29しかし、アブラハムは言った。『お前の兄弟たちにはモーセと預言者がいる。彼らに耳を傾けるがよい。』30金持ちは言った。『いいえ、父アブラハムよ、もし、死者の中から誰かが兄弟のところに行ったら、悔い改めるでしょう。』31アブラハムは言った。『もし、モーセと預言者に耳を傾けないならば、たとえ誰かが死者の中から復活しても、その言うことを聞き入れはしないだろう。』」

黙想のためのノート**次主日の教会暦と聖書日課**

・10月日「聖霊降臨節第19主日」の日課主題は「」。10月第1日曜日は、日本基督教団の行事暦「世界聖餐日」。

・旧約聖書日課は、「アモス書」から、王権に対する神の審判を告げる預言の箇所。使徒書日課は、「ヤコブの手紙」から、人を分け隔てすべきでないことを再確認する箇所。福音書日課は、「ルカによる福音書」から、「金持ちとラザロのたとえ」の箇所。

旧約日課(アモス6章より)

・「アモス書」については、過去の資料「聖書と祈りの会 230816」および前回「聖書と祈りの会」230920を参照。

・「預言者アモス」は、北王国はヤロブアム王(在位＝前786～746年頃)、南王国はウジヤ王(＝アザルヤ王、在位＝前783～742年頃)がそれぞれ統治していた時代に起こった大地震の「二年前」(おそらく前760年頃)に短期間、預言活動を行った者として伝えられている。南北両王国は、この時代、東方のアッシリアの勢力が弱まり、南方のエジプトも影響力を行使できるほどの国力がなく、軍事的にも経済的にも安定し繁栄していた。しかし、それは、両国の関係が良好であったことを必ずしも意味しない。両国は、それぞれの先代王(北王国ヨアシム王＝在位前802～786年頃、南王国アマツヤ王＝在位前800～783年頃)の時代に戦火を交え、南王国は敗北を喫している。その結果、エルサレムからサマリアに多くの戦利品が運び去られたほか(王下14:14)、ヤロブアム王の治世になってからも、ユダの支配下にあった北方の諸都市国家「ダマスコとハマト」がイスラエルに割譲されている(王下14:28)。「列王記」は明言しないが、この一連の言及は、ヤロブアム王の時代、南王国は事実上北王国の属国の立場に置かれていたことを示唆している。南王国ウジヤ王は、おそらく先代アマツヤ王が北王国に敗北した後、事実上北王国の傀儡政権として摂政の立場に置かれ、そのまま王位を継承したものと考えられるのである。当然、南王国の首都エルサレム(＝シオン)には、北王国の外交官が常駐し、南王国の政治を事実上掌握していたはずである。このような、南王国宮廷としては屈辱的な立場に置かれている国際情勢の中で、「預言者アモス」は、おそらく南王国宮廷から秘密裏に特命を受けて北王国に乗り込み、反北王国のプロパガンダ活動として「預言」活動に従事したのだろう。

・日課箇所に、北王国の都「サマリア」や王家「イスラエルの家」に対する批判だけでなく、「シオン(エルサレムの別名)」や「ダビデ」の名が批判的に取り上げられるのは、上述したように、北王国宮廷の支配貴族が南王国宮廷に深く入り込んで支配する実態があったからこそであると、考えられる。

使徒書日課(ヤコブ2章より)

・「ヤコブの手紙」については、過去の資料「聖書と祈りの会 230816」も参照。

・本書簡の差出人「ヤコブ」(1:1)は、通説では、「主の兄弟ヤコブ」と解されてきた。初代教会には、「十二使徒」に数えられる二人の「ヤコブ」がいた。そのうち「ゼベダイの子、ヨハネの兄弟ヤコブ」は、その兄弟「ヨハネ」および「ペトロ」と共に漁師出身で、主イエスのガリラヤ宣教の最初期から同行し、最側近として主イエスを知る立場にあり、主イエスの復活昇天後の初代教会で最重要の指導者の一人となりながら、ヘロデ・アンティパスの迫害によって殉教してしまっていた(使徒12:1～2)。そのころ、エルサレムの教会共同体に残っていた使徒はこのヤコブだけだったと考えられ、その後を継ぐ形で共同体の実質的な指導者として立てられたのが、「主の兄弟ヤコブ」であったとされる。「主の兄弟ヤコブ」は、主イエスの宣教当初はその活動に同行していなかったが、母マリアが宣教旅行に同道するに際して伴い、弟子集団の一角を占めるようになっていったと考えられる。しかし、彼は主イエス存命中はもちろん、初代教会成立時にも、その名が表に登場してくることはほとんどない。また、後世の教会において他の使徒らのように教会指導者としての象徴的地位を認められ続けたわけでもない。にもかかわらず、彼の名によって記されたとされる書簡が正典に加えられてきたのは、初代教会時代、少なくともその母体であるエルサレムの教会共同体において、彼が無視できない重要な役割を果たしていたからであろう。教会外の伝承でも、彼は「義人ヤコブ」として伝えられ、「イエスをメシアとすること」を除けば敬虔なユダヤ教徒として多くの者の尊敬を集めていたと伝えられている。おそらく、初期教会史において彼の存在は、ユダヤ教的伝統をもっとも強く保持したユダヤ人共同体の指導者として一目置かれていたのだろう。使徒パウロも、彼との関係性に強く留意している。また、もっと素朴な見方として、共同体メンバーは、自分たちの信奉する主イエスのことをもっともよく幼児期から知る人物として、「主の兄弟」の言説を頼りにもしたであろう。彼の証言は、主イエスが正統なユダヤ教徒としてのルーツを持ち、その目標が「真のユダヤ教」の確立であったとする理解を支持するものとなったはずである。

・1節「人を分け隔て(すること)」(ポロソーポレープシア)は、「パウロ書簡」でさりげなく用いられている用語だが(ロマ2:11、エフェ6:9、コロ3:25)、新約で他の用例は見られない。パウロが主イエスご自身の教えに遡る鍵語として受けとめていたと推察され、対比的に捉えられがちなヤコブとパウロの福音理解をつなぐ共通項として注目される。

・2節「集まり」は「シュナゴゲー」で、福音書および「使徒言行録」ではもっぱら「会堂」と訳されている。ユダヤ共同体の地域センターとしての「会堂」の意義を、教会共同体が継承していたことを示す言及。

福音書日課(ルカ 16 章より)

・日課箇所は、「金持ちとラザロのたとえ」で知られる。14 章から続く「安息日のファリサイ派議員の家での食事の席」という場面設定の中に置かれた、事実上最後の「たとえ」である。このたとえは、15～16 章で展開された一連の「たとえ」を聞いてあざ笑った「金に執着するファリサイ派の人々」(16:14)に向けて語られた教え(16:15 以下)の一部を成している。「たとえ」に入る前の 16 節の言説は、「マタイ福音書」に並行記事が見られるが、全く異なる文脈に置かれている(マタイ 11:12~13)。

・日課箇所の「たとえ」には、「ラザロ」や「アブラハム」など、「聖書」の他の箇所にも現れる人名が出てくるため、これを主イエスが事実として認識している霊的事象と解する者があるが、それは誤った解釈である。冒頭 19 節で「ある金持ちがいた」と始められるが、これは典型的な「たとえ話」の導入句である。「ラザロ」の名が用いられるのは、おそらく主イエスの親友「ラザロ」(ヨハネ 11 章参照)の名を借りたためであり、「アブラハム」の名が挙げられるのは、おそらく当時のユダヤ社会で「アブラハム伝承」として認識されていた「天上におけるアブラハムのとりなし」という俗説を援用したためである。「ラザロ」は、「ヨハネ福音書」によれば、主イエスが「死者の中から復活させられた者」の一人であり、また、「バタニヤの香油の出来事」(マタイ 26:6~、マルコ 14:3~、ヨハネ 12:1~)の伝承を通して「重い皮膚病の人シモン」と同一視されてきた。

・23 節「陰府」は、ギリシア語「ハイデース」の訳。「ハイデース」は、ギリシア神話における冥界の神の名で、通例「ハデス」と表記。ギリシア神話や古代オリエントの神話では、「生者の世界」と「死者の世界(冥界)」を連続した世界としてイメージするのが通例だが、「旧約」のユダヤ教思想は現世指向が強く、死者は「塵」に帰るものとして扱い、「死者の世界」を想定しない。

来週の誕生日 (10月1日~7日)

主日礼拝の讃美歌から

・21-75 番「今、装いせよ」(= II 95 番)。17 世紀ドイツの宗教詩人 J・フランクと当時随一の讃美歌作家 J・クレーガーのコンビによる。現代に至るまで聖餐讃美として広く用いられている。J.S.バッハは、この讃美歌を用いて作曲している。

・21-56 番「主よ、いのちのパンをさき」(= I 187)は、19-20 世紀米国のメソジスト信徒メアリー・ラスベリーの作詞で、夏期セミナーのために「聖書研究の歌」と題して書かれた。曲は、19 世紀米国で讃美歌作曲家として知られた音楽教師シャーウィンが、この歌詞のために作曲。

・21-79 番「みまえにわれらつどい」(= II 179)は、アフリカ系米国人の霊歌の伝統の中から生まれた讃美讃美で、19 世紀前半の米国聖公会で作られたと考えられているが、詳細は不明。

21-75「今、装いせよ」

Schmücke dich, O liebe Seele

- Schmücke dich, o liebe Seele, / laß die dunkle Sündenhöhle, / komm ans helle Licht gegangen, / fange herrlich an zu prangen! / Denn der Herr voll Heil und Gnaden / will dich jetzt zu Gaste laden; / der den Himmel kann verwalten, / will jetzt Herberg in dir halten.
- Ach wie hungert mein Gemüte, / Menschenfreund, nach deiner Güte; / ach wie pfleg ich oft mit Tränen / mich nach deiner Kost zu sehen; / ach wie pfeget mich zu dürsten / nach dem Trank des Lebensfürsten, / daß in diesem Brot und Weine / Christus sich mit mir vereine.
- Heilige Freude, tiefes Bangen / nimmt mein Herze jetzt gefangen. / Das Geheimnis dieser Speise / und die unerforschte Weise / machet, daß ich früh vermerke, / Herr, die Größe deiner Werke. / Ist auch wohl ein Mensch zu finden, / der dein Allmacht sollt ergründen?
- Nein, Vernunft, die muß hier weichen, / kann dies Wunder nicht erreichen, / daß dies Brot nie wird verzehret, / ob es gleich viel Tausend nährt, / und daß mit dem Saft der Reben / uns wird Christi Blut gegeben. / Gottes Geist nur kann uns leiten, / dies Geheimnis recht zu deuten!
- Jesu, meine Lebenssonne, / Jesu, meine Freud und Wonne, / Jesu, du mein ganz Beginnen, / Lebensquell und Licht der Sinnen: / hier fall ich zu deinen Füßen; / laß mich würdiglich genießen / diese deine Himmelspeise / mir zum Heil und dir zum Preise.
- Jesu, wahres Brot des Lebens, / hilf, daß ich doch nicht vergebens / oder mir vielleicht zum Schaden / sei zu deinem Tisch geladen. / Laß mich durch dies heilige Essen / deine Liebe recht ermessen, / daß ich auch, wie jetzt auf Erden, / mög dein Gast im Himmel werden.

21-56「主よ、いのちのパンをさき」

Break Thou the Bread of Life

- Break Thou the bread of life, dear Lord, to me, / As Thou didst break the loaves beside the sea; / Beyond the sacred page I seek Thee, Lord; / My spirit pants for Thee, O living Word!
- Bless Thou the truth, dear Lord, to me, to me, / As Thou didst bless the bread by Galilee; / Then shall all bondage cease, all fetters fall; / And I shall find my peace, my all in all.
- Thou art the bread of life, O Lord, to me, / Thy holy Word the truth that saveth me; / Give me to eat and live with Thee above; / Teach me to love Thy truth, for Thou art love.
- Oh, send Thy Spirit, Lord, now unto me, / That He may touch my eyes, and make me see: / Show me the truth concealed within Thy Word, / And in Thy Book revealed I see the Lord.

21-79「みまえにわれらつどい」

Let us break bread together

- Let us break bread together on our knees;
Let us break bread together on our knees.
Refrain: When I fall on my knees, / With my face to the rising sun, / O Lord, have mercy on me.
- Let us drink wine together on our knees;
Let us drink wine together on our knees. [Refrain]
- Let us praise God together on our knees;
Let us praise God together on our knees. [Refrain]